

アクティブ・ラーニングによる心理教育

— 自傷行為防止教育の取組み —

今野 紀子 (東京電機大学)

キーワード: 自傷行為防止, アクティブ・ラーニング, 心理教育

1. 目的

自傷行為の実態に関する 2010 年度全国調査データによると、自傷経験率は 16-29 歳の女性で高く、また、喫煙者や虐待経験者で自傷経験率が高いことが示されている¹⁾。自傷行為は将来自殺企図につながる可能性が高いとされ、早急な対策が求められている。自傷行為がしばしば自身の感情コントロールを目的として行われる点に鑑み、こうした手段によらずに感情を制御するための、心理教育を含む幅広い支援が期待される²⁾。本稿では、アクティブ・ラーニングによる自傷行為防止教育の取組みの有用性と今後の課題を検討する。

2. 方法

2.1 実施の流れ: アクティブ・ラーニングは、教員による一方向的な講義形式の教育から、学修者の能動的参加を中心とした学びへと転換した教育であるが、今回、自傷行為の防止対策を授業内(教職課程科目)の課題に選んで実施した。調査研究と発表を担当するグループ(発表班: 1 グループは 6 名程度)が、グループ内のメンバーで協力して以下の学習課題に取り組み、その成果を 40 分間のプレゼンテーションで発表した。発表グループ以外(被発表班)の学生は、発表班のプレゼンテーションを聴いて質疑を行ない、それらに対して教員が必要に応じて助言等のフィードバックを行うことで、当該学修が深化するように工夫した。

2.2 学習課題: 自傷行為の定義・歴史(過去からの俯瞰)・現状(関連統計・メディアの取り上げなど)・社会的背景や要因・自傷行為者の特徴・学校や家庭で求められる対策・その他自傷行為防止全般について調査研究する。

2.3 対象者: 2016 年 6 月~7 月、大学生 39 名(男性 30 名, 女性 9 名)を対象に実施した。当該データの利用および発表に関しては、十分な説明を行い、同意を得た。

2.4 評価方法: 学修後、以下の 10 項目について 5 段階リッカート尺度(1[まったくない]~5[非常にある])で評価した。前興味関心度(Q1:学修前、自傷行為についてどの程度興味関心があったか)・後興味関心度(Q2:学修後、自傷行為についてどの程度興味関心がわいたか)・前知識度(Q3:学修前、自傷行為についてどの程度知識があったか)・後知識度(Q4:学修後、自傷行為についてどの程度知識を得たか)・自傷行為者への理解度(Q5:自傷行為者についてどの程度理解できたか)・学校の対応理解度(Q6:求められる学校の対応についてどの程度理解できたか)・家庭の対応理解度(Q7:求められる家庭の対応についてどの程度理解できたか)・防止策理解度(Q8:自傷行為防止策についてどの程度理解できたか)・学びの重要度(Q9:自傷行為防止について学ぶことは、どの程度重要だと思うか)・学びの意欲度(Q10:自傷行為防止について、さらに学んでみたいと思うか)。また、自由記述形式の質問により、学びの振り返りとアクティブ・ラーニングに対する意見・感想を調査した。

3. 結果と考察

評価結果を表 1 に示す。ウィルコクソンの順位和検定の結果、発表班の方が被発表班に比べて前興味関心度が 5%水準

で有意に高かった。その他の項目では、有意差は認められなかった。学修後は、全対象者の興味関心が 5%水準で、知識度が 1%水準で有意に上昇した。

表 1 評価結果(平均値・標準偏差)

	前興味関心度	後興味関心度	前知識度	後知識度	自傷行為者への理解度	学校の対応理解度	家庭の対応理解度	防止策理解度	学びの重要度	学びの意欲度
全体	35	40	30	44	40	43	42	43	45	41
発表グループ	1.1	0.7	1.2	0.7	0.8	0.5	0.6	0.5	0.6	0.8
被発表グループ	4.1	4.1	3.5	4.5	4.3	4.5	4.2	4.5	4.6	4.3
発表グループ	1.1	0.9	1.4	0.7	0.8	0.7	0.8	0.5	0.5	0.8
被発表グループ	3.3	4.0	2.8	4.4	3.9	4.2	4.2	4.3	4.5	4.0
発表グループ	1.1	0.7	1.1	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.6	0.8

上段:平均値、下段:標準偏差

学びの意欲度を目的変数、その他の項目を説明変数とした CS 分析を行なった(図 1)。その結果、学びの意欲度には、前興味関心度、前知識度を高めることが有用であることがわかった。

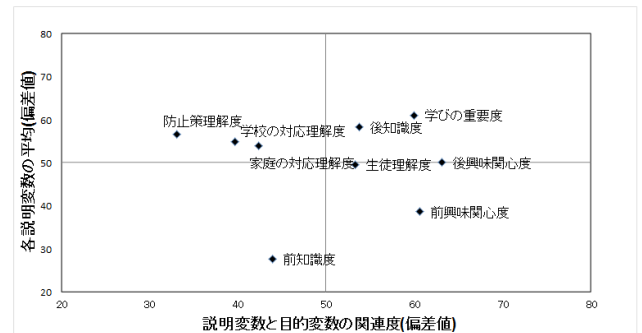


図 1 CS 分析結果

発表班の学生からは、主体的に調査研究をすることで自傷行為の防止について深く考え、学ぶことができたとの意見が多かった。被発表班の学生からは、「身近な事例が興味を引いた」「体験談が聞けてよかった」という感想や意見が述べられた。学生たちの実感をベースとした発表内容は、被発表側の学生たちにとって、同世代の感覚を共有することができる良い学びとなったようである。アクティブ・ラーニング導入により、発表班・被発表班ともに有意義な学修となった。今後の課題としては、学修前の興味関心や知識の有無が、自傷行為防止の学びの深度に顕著に影響するため、平素から自傷行為防止についての心理教育を実施することが重要と思われる。

利益相反の開示

発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。

引用文献

[1]阿江 竜介, 中村 好一, 坪井 聡, 古城 隆雄, 吉田 穂波, 北村 邦夫:わが国における自傷行為の実態 2010 年度全国調査データの解析, 日本公衆衛生雑誌, 59(9), 665-674, 2012.
 [2]神澤 創, 中田 玲奈, 才野 雄大:若年者の自傷行為と精神的健康に関する研究, 5, 57-63, 2016.

(KONNO Noriko)